

茅野市民館 10 周年記念事業 縄文アートプロジェクト「縄文のうた」詩を書こう！

参考資料「茅野市・八ヶ岳山ろくの縄文について」

## 縄文プロジェクトより（茅野市・茅野市教育委員会 平成 22 年 3 月） 抜粋

### 【縄文文化】

縄文文化は約 1 万 3 千年前から 2 千 3 百年前まで、約 1 万年にわたり、自然と共生・調和しながら高い文化を維持し続けた世界史的にも希な文化です。このような自然と共存する社会の仕組みやその精神性は、西欧の新石器時代には見られない、日本列島独特の文化として注目されています。

### 【茅野市のアイデンティティ】

私たちのふるさと茅野市の原型は、今から約 5,000 年から 4,000 年前の縄文時代中期に、八ヶ岳の豊かな自然に支えられ、この地に 1,000 年もの長きにわたって繁栄した縄文文化にあるといえます。この地の縄文人は、共に助け合って元気に暮らし、高い文化を育みました。八ヶ岳の豊かな自然に抱かれて、世界に誇る高い縄文文化を育てた地域です。「縄文文化」には縄文人の生き方「友愛・冒険心・創造の精神」などが、確かに存在します。

### 【目的】

時代の転換点に立つ私たちは、この郷土の誇りである縄文文化と、それを育てた八ヶ岳の豊かな自然に学ぶことにより、現在の生活を見つめ直し、より良い生活を求めてまちづくりを進め、「縄文」をいかした新たな地域社会の構造の創出を目指しています。

また、様々な機会を通じて内外へ情報発信し、茅野市の統一的なイメージアップを図ります。

## — 「縄文物語」 —

### 【プロローグ】

今から 5 千年前、この地は日本の縄文文化の中心地だった

そこに澄んだ空気があった、青い空と白い雲、天に向かって大きく伸びる木々には豊かな果実が実っていた。そして、その地には何故か、人を惹きつける神秘的な力が溢れていた。

お隣の中国では黄河流域に稲作を行う新石器時代がはじまり、遠くエジプトでは牧畜や農耕による都市国家から、上下に統一された初期のエジプト王朝が始まります。同じ頃、日本のほぼ中央、八ヶ岳山麓では縄文時代中期の文化が大きく開花しました。

**【縄文中期の人々の生活の舞台】**

八ヶ岳山麓は西・南向きの斜面のため全体に日当たりが良く、山麓の各所から湧き出る水は豊富です。斜度が小さく、大きな起伏の少ない地形は縄文人の日常生活を助けました。

また、海拔800～1000mの間に広がる山麓は、暖温帯と冷温帯の落葉広葉樹林が混交する、コナラ・クリ・ミズナラなどの堅果類をはじめ、人にとっての有用植物が豊富な植相をなしています。植物の豊かな森には動物も多く種が生息していました。縄文人はシカ・イノシシを中心に、それらの大きささまざまな動物を狩猟の対象としました。

動植物の豊かな森は土地を肥やし、また森を再生させました。縄文人は八ヶ岳山麓の豊かな自然から食料や生活物資を得て暮らし、高い文化を築いたのです。また、縄文人にとって大切な石材である黒曜石の原産地であることも、繁栄の要因であったと考えられます。

**【狩猟と採集の生活】**

縄文土器には敷物の痕跡の他、布の痕跡が残っているものがあります。このことから縄文人が布を用いた衣服をまとっていたことが推測されます。実物の出土がなく、描かれたものがないので、そのデザインまでははっきりとしません。しかし少なくとも、かつての漫画に描かれたような（実際には旧石器時代をイメージしていたが）、毛皮だけをまとっている姿は払拭すべきでしょう。もちろん、冬季には狩猟で得た動物の毛皮は利用されていたと思われます。

住居は一般には地面を掘りくぼめて床面に柱の穴を設け、柱を建てて屋根を掛ける竪穴住居が用いられましたが、平地式の住居や高床式の建物も発見されています。屋根は与助尾根遺跡の復元家屋のように茅で葺いたものが想像されてきましたが、各地の発掘調査の成果により、木の皮を葺き、その上に土を被せた土屋根構造の住居を復元している遺跡も出てきました。

集落を構成する単位である住居には、現代の家族と同じように両親や子どもといった4～5人が生活していたと考えられています。同時に存在した住居は数軒、多くても十数軒であろうと思われます。限られた山麓の自然の恵みを分かち合うことができるように集団関係を発達させ、豊かに暮らして行けるような地域社会をつくっていたと考えられます。

**【豊かな縄文文化】**

縄文文化の文化的豊かさは、自然と共生して暮らした縄文人が生活用具に用いた、土器や木製品などの多種多様な出土品にみることができます。芸術的評価の高い様式の縄文土器が発達しました。

縄文人はこれら様々な土器に把手や文様を施しました。把手には蛇を象ったもの、顔面把手という精霊や呪術者を表現したといわれるものもあります。文様には人体や動物を想わせるものがあり、全体として物語性のある文様が構成された土器もあります。こうしたことから、土器の文様には縄文人の精神性や信仰観が表われていると考える人もいます。

**【宮坂英式 みやさかふさかず】**

宮坂英式先生は昭和5年から尖石遺跡の発掘を始め、困難な社会情勢下でも地道な調査を続け、縄文時代の集落研究に輝かしい業績を残されました。

当時、宮坂先生は泉野小学校の教師でした。宮坂先生がその後も尖石遺跡の発掘研究に打ち込めたのは、校長や同僚教師達の理解と協力が大きかったといわれています。また、宮坂先生は多くの協力者に支えられました。宮坂先生が居住した南大塩を中心とする豊平の人々、宮坂先生の教え子など泉野の人々にも支えられて尖石遺跡の研究を深められました。もちろん、ご家族が最大の理解者であり、協力者でした。

**【なぜ、造形的、神秘的な美しい土偶や土器が造られたのか】**

縄文土器は主に食料の煮炊きに用いられましたが、幾何学的な文様や抽象的な文様が描かれています。また、煮炊きには不必要なほどの美しい装飾が施されていることが、機能重視となる後の容器と大きく異なります。一見独創的な形や装飾のように見ることができても、こうした装飾は時期や地域により特徴があり、そのルールに則って製作されています。

縄文土器や石器が日常の生活に直接関わる道具なのに対し、土偶は精神生活に関わるものとして第二の道具といわれます。そのほとんどが女性像であり、妊娠している姿を現していることから安産のお守りではないかと考える説もあります。集団の祭祀に用いられたとも考えられています。大きさも様々で、大形のものほど完全に近い形で遺存するのが多いのは、集団のシンボルとして何回も祭祀に用いられるよう、特に精密に製作されたためだと思われます。

**【国宝土偶「縄文のビーナス」であり「仮面の女神」】**

その代表が国宝土偶「縄文のビーナス」であり「仮面の女神」です。「縄文のビーナス」は縄文中期の集落の中央部の穴に埋められた状態で出土しました。「仮面の女神」の仮面は 逆三角形に大きく表現されています。当時の巫女が祭祀を司った際に仮面を装着した姿と思われます。

**【終わりに】**

国宝土偶「縄文のビーナス」や「仮面の女神」には、縄文人の祈りや思いがこめられています。土偶に込められた縄文人の祈りや思いには、時代を超えて共通する人間の精神の普遍性があります。

忘れ去られつつある自然への感謝や畏敬の念、自然との共存の原点は縄文時代にあったと考えられます。また、漆・木工芸・竹・樹皮細工等の伝統的な工芸技術も縄文時代に萌芽したと考えられています。このように、「縄文」を探ることは現在の我々の基盤を見つめ直すことになるのであり、そのためにも縄文文化を育てた郷土の自然と、縄文遺跡をはじめとする歴史遺産を後世に伝え残していかななくてはなりません。